

特別企画 戦禍を逃れて三年

ウクライナ避難者が自ら語る 「いま」、「これから」

帰国か定住か、
自立を迫られる中で。

2/22(土) 13:30-17:00

(第2部終了後、交流・情報交換会あり)

対象者：ウクライナ避難者、支援団体・協力者、行政、メディア関連

場所：コモレ四谷タワーコンファレンス (四ツ谷駅徒歩1分) [主催] 公益財団法人 日本YMCA同盟

ロシアによる軍事侵攻から3年。世界を巻き込み混迷の様相となり、終結の気配はありません。日本では現在1974名のウクライナ避難者が生活しています(2024年12月末日現在)。これまでに危険を顧みず帰国した人たちが700名程度いる一方で、いまなお新たな来日も絶えません。生活基盤である日本財団を始めとする財政支援が3年を区切りに来春から順次終了、縮小が決定しています。就労、日本語、メンタルなど課題を抱えるなか自立を迫られ、避難者たちは「日本での定住か、帰国か」、心は不安のうちに大きく揺れ動いています。

YMCAは世界各地で避難者支援を行い、日本ではこれまで1700名の支援、渡航から生活開始・自立に向けた伴走まで行っています。

今回は、独自のウクライナ避難者の大規模な調査結果と、あらゆる世代の当事者の声をわかち合い、私たちがこれから向かうべき道を共に探りたいと願います。



第1部 13:30-15:00

ウクライナ避難者が自ら語る「いま」、「これから」

オープニングアクト

避難者による劇団マーフキ (MAVKY)

1. ウクライナ避難者をめぐる全体概況報告

YMCAウクライナ避難者調査結果を踏まえて
(日本YMCA同盟)

2. ウクライナ避難者による意見提示

〈登壇者〉

ベルナツカ・ユリヤ ウリバチョバ・イリーナ

3. フロアセッション

各世代が自ら語る「いま」「これから」

第2部 15:30-16:30

応答：私たち日本社会が問われていること

パネリスト (予定)

横山由利亚

(公益財団法人日本YMCA同盟ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者)

中尾真理子

(東京都生活文化スポーツ局 都民生活部 多文化共生担当課長)

小野一馬

(NPO法人ビューティフル・ワールド理事/大分県にて避難者受入れ)

榊原アレクセイツェヴァ ナターリヤ

(NPO法人日本ウクライナ文化協会/名古屋にて避難者受入れ)

山田拓路

(NPO法人メタノイア代表理事)

大森佐和

(国際基督教大学教員)

日本YMCA同盟

公益財団法人 日本YMCA同盟

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2-11 Tel 03-5367-6640





みつかる。
つながる。
よくなっていく。

戦禍を逃れて三年 ウクライナ避難者が自ら語る 「いま」、「これから」

「戦争が終わっても（停戦 / 急戦）、日本に残り定住したい、しばらく残りたい」（90%が回答）

「パート先で時間を増やしてもらえるだろうか」（就労者はパートタイムが大半）

「一人で子育てに苦悩。自分のキャリアや日本語学習は後回し」 「もう帰る家、帰るところがない」

第1部登壇者紹介

ベルナツカ・ユリヤさん（写真中央）

キーウ出身（50代・女性）

本国ではIT会社を経営し、息子を頼って単身来日。その後、母親、妹家族を呼び寄せる。避難しているエンジニアが経済格差や休業で本国の仕事を続けるのが困難、日本語が壁となって専門性を活かして就労することが難しいことを受けてIT技術を生かして就業するための研修コースを独自で開発。避難者の経済的な自立はもとより、自尊心向上、IT技術を通して日本社会への貢献も常に考えている。

ウリバチョバ・イリーナさん（写真左）

スームィ出身（40代・女性）

国立キーウ大学を卒業後、弁護士として活躍。ウクライナ弁護士会所属。来日後は、千葉県に住みながら、日本人弁護士と共に、法律面での支援が必要なウクライナ避難者のサポートを積極的に行う。自身も子どもがおり、多感なティーンエイジャーの居場所づくり、サポートにも注力する。



フロアセッション登場予定者

I・Bさん ハリコフ出身（30代・男性）

妻と幼児の3人でハリコフから石川県七尾市に避難。能登半島地震で住居半壊となり金沢に避難、その後東京に移住。ウクライナではプロのバスケットボール選手であったが日本では現在求職中。不安定な生活が続き、日本語、就労、子育てなど目途が立っていない。

R・Tさん キーウ出身（20代・男性）

17歳で来日して現在20歳。「誰も殺したくない」と高校卒業を目前にリトアニアを経て日本に単身で避難。将来の夢は航空関係のエンジニアになること。昨春より都立高校に入学し、一から勉強を重ね大学進学を期待しているが日本語と経済的な課題に苦戦している。

O・Sさん ハリコフ出身（40代・女性）

中学生の息子と来日。独学で日本語を集中的に勉強し、いち早くグローバル企業に就労、他の避難者の就労サポートも行う。子どもが日本の学校のスピードに馴染めない、避難先での母子生活で子どもが孤立しがちななど子育てに関わる課題にも奮闘している。

V・Rさん キーウ（クリミア）出身（60代・女性）

娘を頼り夫と来日。来日当初はひきこもりがちであったが、持ち前のガッツと得意の手芸を活かしてウクライナ文化を伝え、販売し、少しずつ外に出るようになる。日本語習得がなかなか進まず、現在は公的な財政支援で生活しているため、春以降の生活に不安を抱えている。

YMCAウクライナ避難者支援プロジェクト

2022年3月当初から、ウクライナから日本への来日避難を、グローバルネットワークを用いて展開。同年4月には在日ウクライナ大使館から依頼を受け国内の避難者支援、7月からは東京都と協定を結び、都内に集中する避難者の生活の見守りを行う（「東京都ウクライナ避難者マッチング支援事業」）。これまで戸別訪問・面談を行って来た避難者は1700名を超える。



2024年度も戸別訪問を継続。特に増えている若い単身避難者は相談相手がおらず孤立しているケースが多い。

民間NPOとして、これまでの国内外の人道支援・災害支援のノウハウをベースに、一貫して一人ひとりに伴走し、人間同士の深いつながりを大切にし、息の長い支援を行っている。



2024年6月
日本で避難生活を送るウクライナの学生4人が全国のYMCA代表者が集まる会議でそれぞれの現状、夢などを語る。



2024年8月
毎年恒例、小・中学生を対象とした絵日記、計算ドリルなどの宿題サポートをボランティアの方々と共に開催。



2024年12月
ウクライナ民話「てぶくる」を題材とした人形劇鑑賞とサンタと共に楽しいクリスマスを過ごす催しを開催。



ウクライナ避難者支援
活動紹介ページ

